



町民文芸

只見短歌会

八月詠草

大塚栄一

指導

雨降らぬこの夏咲きし紫陽花は持ちし色出せず秋風経ちぬ

馬場 八智

伝え聞く駅の階段を上りつつ膝病む友の辛苦偲ばる

関谷登美子

欲しき時降る雨音は楽の音に幾日も続けば疎ましくなり

渡部ゆき子

婆と呼ばれそのひと声に薬にもおとらぬ程の元氣をもらふ

目黒 富子

飼ひ猫に留守番させて出掛けれど仏壇の鮎食はずに待ちぬ

新国由紀子

盆休暇帰省せし娘は中皿に野菜がいいと幾たびも盛る

渡部ヨリ子

片言に話かけくるひい孫に意味わからぬまま相槌を打つ

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

九月例会

目黒十一

指導

若杉の匂ふ燈籠高々と
古川に淀む盆供を見ておりぬ

礼

夏草や老いも若きも墓参り
蜻蛉釣り子らの歓声在りし頃

信

栗剥いて三代家族困炉裏端
かぎりなく尻だけ見えて茗荷畑

一穂

ほめられてほめられている心太
夏力ゼや机の上はそのままだ

都

村祭掲げし旗に集いたり
絵灯籠自責ばかりの三回忌

修一

大早畑の裂け目の中広き
玄関の靴散らばって帰省の子

味代子

倒伏の稲田一斉に群雀
梅酒壺に満々溜めけり糸瓜水

吉児

白萩や雨滴をふくみ広がれり
野良仕事意のままならず薄紅葉

弘子

真綿引く妣の手偲ぶ秋の雲
蜻蛉の千の眼に千の雲

幸生

おみくじを見せ合う親娘秋うらら
戸を開けて無月のひかり入れにけり

恒夫

